

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)  
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別授承認可第三五二號  
昭和二十七年四月一日發行

第十八卷 第四號

# 浄土

## 四月號

山花

まつ

櫻

吉田絃二郎  
眞野正順

平等と平和の教  
山崎 宏

鎌倉大佛七百年の記  
佐藤 密雄

1952

4

# 浄土 四月號

かまくらの大きほとけは青空を

み笠と著つつよろづ代までに

御佛のはなつ光はとことにはに

國のもろ人まねくすくはむ

(伊藤左千夫)



## 目次

山 櫻……………吉田絃二郎(2)

花 まうり……………眞野正順(20)

降誕會讃歌……………(1)

### 大佛集 鎌倉特

鎌倉大佛七百年の記……………佐藤密雄(27)

外人の見た鎌倉大佛……………編集部(30)

近頃の大佛雜感……………佐藤治子(30)

鹿野苑に想う……………藤吉慈海(13)

平等と平和の教……………山崎宏(5)

名士たよりすぎてはいないか……………村岡花子(10)

訪問……………藤井實應(16)

浄土有縁の人々……………鶴飼ふさ(16)

NHK放送討論會

椎尾辨匡

宗教は今のままでよいか……………龜井勝一郎(22)

大須賀貞夫

# 歌 讚 會 誕 降

花咲き、鳥歌う、常春の樂園。

もののみな生き生きて、すすく育くまれ行く大自然のむなじ。

ゆくりなく、そゞろあるきのそのかいまに。

はからずも擧げなせる大生命の、しづまれる花園はなぞのに響く音聲おんじやう。

「われは尊く、われのみぞ生くる喜び、ひとのみなわれに従え」

王侯も、貴族も、美妃も、庶民も、奴隸も。

賢者も、愚者も、富めるも、貧しきも。

いけとしいけるもの、すべての讃えまつり、慕いなびけるみおしえぞ、ここに始まる。

かくの如くに生れき、かくの如きに移ろい、かくの如くに消え去りゆく。

かたちあるものこそはかなし、かたちなきおしえのみちこそ不滅なれ。

現し世に捉とらわれず、仇し姿にまどわす。

ひたすらに進むべし、悟りの道を

ひたすらに求むべし、菩提の花を

ひとの一人、生きるは易し。

而もなお、ひと一人、眞實に生きるはかたし。

ところぞ、インド、ルンビニーの園

時ぞ、今を去る、二五〇〇餘年のむかし。

あゝ、たたえん、四月八日、佛陀降誕のよろこびを。



# 山 櫻

吉田 絃 二 郎

暦の上では春になり、庭の梅も満開だが、今日も牡丹雪が、音もなく降りつゞいてゐる。

終日火鉢のそばに坐つて硝子窓越しに雪をながめてゐるとさまざま昔のことが思ひ出される。

芭蕉翁は伊賀の上野に歸つた時、をりからさかりの櫻を見て

さま／＼のこと思ひ出すさくらかな

とうたつてゐるが、わたくしは今日雪を見てゐて、ふと、芭蕉のこの句を思ひ出した。雪をながめて花を思ひ出すのも變だが、さかりの春を待つ心の切なるがためであらう。

窓の外には牡丹雪が降りしきつてゐるが、わたくしの聯想の幕には、芳野の花や、芳野の旅のかへりに飛

鳥川のほとりを歩いた時茶亭の井戸の傍に咲いてゐた八重櫻の風情が映つて来る。嵐山の花、御室のさくらという風に後から後からと花のすがたが泛かんで来る。わたくしは自分の健康がゆるさないので、ふたたび芳野や嵐山の花を見ることはできないであらうことを思ふとさびしい。しかしこれは贅澤な考へである。

かつて一度でもあの美しい花をながめたといふことだけでも大きなめぐみである。わたくしは一步も部屋を出ることができないやうな病に取りつかれたとしても、飛鳥川の花、御室の花の姿を大事に胸に抱くであらう。

わたくしの胸に抱かれた花は、今日のやうな寒い雪の日にも撩亂として咲き匂ふ。

わたくしは花の咲くころになれば故郷の山を思ひ、草山の一本の山櫻を胸に描いてゐた。その山櫻はいつも三月二十五日の卒業式のころは雪のやうな花を咲かせてゐた。子供心にもわたくしは楚々たる山櫻の美に惹きつけられて、春ごとに草山に登つて、その一本の山櫻の花の下で半日を楽しんだ。

五十幾年をへだてゝなほわたくしの胸には草山の櫻が春風に吹かれてゐるのであつた。ところが數日前、故郷の友人が訪ねて見えたので草山のことを問うて見たら、「あの山のあたりはどこもかしこも鑛山が開かれて、今では一本の木もなくなつた。」といふ答へであつた。

それにしても五十幾年前にわたくしの胸に刻みつけられた故郷の春の山はさながらにわたくしの思ひ出に生きてゐる。そこに咲いてゐた山櫻も翁草も童堇も、そこに鳴いてゐた雲雀も鶯もさながらにわたくしの心の裡に生きてゐる。

わたくしは今、庭に降りしきる牡丹雪をながめつゝ山櫻かをる故郷の山の春を如實に觀じてゐる。

わたくしは思ふ。もしわたくしたちが一切の所有を失つたとしても、一切の名や地位から蹴落され、たゞ

獨り病軀を抱いて生きなければならぬとしても、わたくしたちは心の世界に於いて富める人でありたい。牡丹雪の中に住んで故郷の春を觀することのできる人間の心の無限なる富を尊く思ふ。有限の世界に在りて無限の世界を觀じ、罪業の現世に生きて清淨の佛光を觀ずる人間の心を尊く思ふ。

春の淡雪をながめてゐると花やかな入谷田圃の舞台面が泛かんで来る。やる瀬ない延壽太夫の「三千歳」の清元が聞えて来る。松助の丈賀、羽左衛門の直次郎、梅幸の三千歳が浮かんで来る。わたくしはしばらく絢爛たる歌舞伎の舞台に惹きつけられる。しかしやがてわたくしの心は降りしきる現實の牡丹雪に引きもどされる。わたくしはそこに現はれてゐた延壽太夫も松助も羽左衛門も梅幸もみんな墓の下に眠つてゐることを今さらのごとく感じる。そして雪の日にわたくしと義母と妻と三人で根岸の里から俵を運ねて、あの芝居を見に行つたのであるが、わたくし一人が生き残つて雪をながめてゐることをしみじみと思ふ。

ひとり生きてながむる雪の寒さかな

わが骨の蒲團に痛む夜寒かな

このころこんな句を作つてみた。

かつては夜が来て寢床に就くことは一日の中、一番の楽しみであつた。それは眠つてゐる間だけ一切のさびしさからも救はれるからであつた。眠りは救ひであつた。

ところでこのごろは夜具の重みで、骨が痛んで、そのたんびに眼が覺めることを知るやうになつた。自然夜が来て寢床に入らなければならぬことが、毎日恐ろしいことに思はれて來た。同時に若いころ老人たちの夜具の重さをかこつ言葉を上の空で聞いてゐたことを、今になつてすまないことに思う。

しかし夜具の重さを歎ずるやうになつたために、わたくしはこのごろ寢床に入ると同時に合掌することを覺えた。眼がさめた時亦合掌するやうになつた。ありがたいことである。

わたくしたちは一つの病にも人知れぬ悩みを持つてゐる。時として勇氣を挫かれる。しかしそんな折、ミケランゼロのことを想ひ出すと新たな勇氣を見出す。かれは十四の病を苦しみながら、九十年の生涯を精進しつづけた。

牡丹雪をながめてゐるとわたくしの記憶には無名の俳人鷗州がよみがへつて來る。雪の日にかれはよく歌舞伎座の使ひにやつて來た。ありし日の不運なかれのことを思ふと春の淡雪は一しほあはれである。

鷗州が使ひに來たり春の雪

もう一つ芝居に關して故人の思ひ出を書かう。わたくしの書齋に二尺八寸の左團次の「毛拔」の羽子板がある。わたくしの妻が亡くなつた翌年の春左團次はその羽子板の裏に

追羽子や足らはぬ人の去年今年

といふ句を書いてくれた。

それは昨日今日のやうな氣がするが、左團次も歿くなつて數年になる。

今日は終日春の雪に閉ぢ籠められてゐるせい、はなやかな芝居の人の思ひ出に耽つた。

振りかへつて見ると、はなやかであつた芝居の人たちの死後ほどさびしいものはない。

おもしろうてやがて悲しき鵜舟かな（芭蕉）

# 平等と平和の教

文學博士  
東京文理大學教授

山崎

宏

私は佛教の専門家ではありませんが、日頃佛教に多少の興味をもち、東洋の歴史をしらべて居りますので、これから過去の東洋において佛教の果たした役割をかえりみ、そこから今日の問題について若干の所見をのべて見たいと存じます。

御承知のように佛教は今から凡そ千五百年程前に、インドのシヤカが開いた宗教でありますが、それはインドの民族の宗教というよりも、初めから世界宗教としての性格をもつていたのであります。西暦前三世紀頃に殆んどインドを統一したアシヨカ王は、セイロンやビルマ地方の外に、ギリシヤやエジプト方面にも、佛教を布教するための指導官を派遣したといわれて居ります。しかし其後、佛教は今のイランより西の方には格別の發展を示さず、インドより東方のアジア各地に廣く傳わるようになりました。

この東洋に傳わつた佛教には御承知のように二つの大きな

系統があります。一つは此インドのカシミール地方から、中央アジアを通り、一世紀頃に中國に入つたもので、朝鮮や日本もこの系統の佛教國であります。この系統の佛教は一般に北方佛教、大乘佛教などと呼ばれて居りますが、主として中國で漢文に譯された經典を用いるもので、深い教理哲學をもち、また現實的な中國文化と深い關係をもち、社會的に積極的に活動する特長をもつて居ります。なお北方佛教という場合に、チベット佛教もこれに入れることが出来ます。それは中國佛教と深い關係をもちながら、七世紀頃インドから入つた佛教を主としたので、普通ラマ教とよばれましたが、やがてそれが蒙古や滿州方面に廣く傳わつたのであります。

以上の北方佛教に對して、南インド・セイロン島などから東へ傳わつたものを、一般に南方佛教といひます。この南方佛教には現在セイロン・ビルマ・シアンなどに厚く信仰され

ているものと、かつてカンボジアからジャバ・スマトラなどいわゆる南海地方に傳わつて、今日では亡び、有名なボロブドールとか、アンコールワットなどの莊麗な遺跡をとどめているものがあります。第一のセイロン・ビルマなどに現存するものは、教理よりも日常の嚴格な戒律を重んずるので、小乗佛教ともいわれて居りますが、インドのパーリー語經典によつて居るところから、むしろパーリー佛教とよぶべきであるといわれて居ります。第二の南海地方にもと發展した佛教は、インド古來のバラモン教と混成したものでありましたが、十四五世紀に至つてインド方面からイスラム教（回教）が入つて來ると、次第に衰えて行つたものであります。

なお發祥地のインドでは、十世紀頃から佛教は衰微して、今日ではバラモン教の改變したヒンズー教が廣く信仰され、十一世紀頃から傳來してイスラム教と共に並んで、國家もヒンズー教のインドと、イスラム教のパキスタンに分れてゐることは十分御存知のことと存じます。

さて以上のように佛教は西南アジアを除くアジアの大部分に擴まつた國際的大宗教でありまして、今もなおキリスト教・イスラム教と共に世界の三大宗教の一つとされていますが、それはたゞ早くから東洋各地に弘まつたというだけではなく、世界にも比類のない高い豊かな精神文化と宗教藝術をくりひろげ、更にそれぞれの地方の社會・經濟上にも大きな影響を及ぼした點に於いて注目されるのであります。

この東洋の各地に展開された佛教美術や、佛教哲學は多くの人がいろいろに一種の貴族文化と見ることは出來ますが、佛教は決して一部の上流貴族や、封建的特權階級の間にだけ、弄ばれたものではありません。この點、私はむしろ佛教を、古代的・封建的であつた過去の東洋社會に、平和な一すちの四民平等の道を開いたものと見たいのであります。日本や中國でも、古くから佛教は村や町の庶民の間に入りこみ、かれらの貧乏な生活から來る病氣や、色々の不安などを除くために、どれだけ多くの高僧が一生懸命にはたらいたか判りません。この點、中國には古くより儒教などがありましたが一一般庶民によく及ばず、また多く庶民を相手として來た道教は迷信化して居りましたので、佛教は見すてられ勝ちな大衆を味方として、通俗講演をやり、色々の講や結社などの信仰團體を作つて、正しい信仰生活を指導し、また無盡という庶民金融などをなして大衆の福利を増進しようといひました。これはわが飛鳥奈良朝の頃でしたが、時の中國の王朝は、民衆の勢力がこれによつてもり上り、その不満を爆發させることを恐れて、僧侶が村や町に自由に旅行することを禁止し、有名な三階教の無盡藏をも禁壓してしまつたのです。

しかし僧侶の不斷の努力によつて、佛教が廣く東洋の民衆生活にしみ通つたことは驚くべきもので、われわれ大衆がなぞという大衆という言葉にしても、すでにそれが佛教用語であつたり、家に歸れば先ず玄關という言葉が佛教から出たも

のであるという有様であります。

つい先日、私の家に近所のおけ屋が参りまして、小春日和の庭前きで、仕事をしながらいうことには、近頃自分の近くの強慾な高利貸が、四十そこその年で死んだが、子供もなく今は農地改革で土地も失つて、おかみさんが困つてゐる。これは全く因果應報ですよ、恐ろしいものだ、といつていました。こうした考方はこの老いたおけ屋さんだけではなく、東洋人の考方のどこかに残つてゐるようであります。

東洋の民衆は早くから佛教的な考え方で精神のより處を求めております。この點、大きな力をもつたものに、この因果應報信仰があると私は考えます。應報信仰はもとよりバラモン教から佛教が取入れて、廣く東洋社會に影響を與えたものであります。後に述べるようにそれが何事も因果應報で仕方がないというような、いわゆる東洋的あきらめの思想に通ずるので、古代的な專制主義や封建的勢力に利用されたことは否定出来ませんが、併し東洋の民衆も決して最後まで權力に屈服するものではなかつたのであります。それならば、その際、立ち上る民衆は佛教に何を求めたであらうか。これは前の因果應報信仰と共に、よく考えて見なければならぬ歴史上の大きな問題であります。

前に敍べたように東洋の庶民大衆は、村々をまわつて慈悲平等をとく佛教の僧侶の旅行を禁ぜられ、頼みにした無盡金

融も禁壓され、一時は今の自分を因果應報とあきらめても、特權階級の壓力が次第に加わると、ついに堪えかねて暴動化し、それが進んで革命的叛亂と化したことは東洋史上に枚舉に遑がないのであります。その場合、かれら叛徒大衆は多くの場合、佛教の名をかり、さまざまなスローガンをかかけました。わが國の戰國時代の一向一揆などもその例であります。が、中國では解放をさけび平等を求めるかれらを、初め多く彌勒教匪とよび、後にその系統を引く白蓮教徒の亂が絶えませんでした。私は今ここでその善惡を批判しようとするものではなく、ただ壓政に苦しむ民衆が、宗教的信念から唯一のより處として佛教を選んだことに注目したいのであります。

然らば佛教は本來、かかる民衆の信頼に答えるものであらうか。ここでふり返つて見ると元來、佛教はカーストといわれたインドの嚴重な階級制度の最も上位にあつたバラモン教徒の特權意識に對抗し、その專横を打破するために開かれたものであつたのです。カースト制度では最上位のバラモン族の下に武士・平民・奴隸の三階級をなしたものが最も原始的な型であつたが、これに氏族制度やギルド的な共同體意識がもち込まれ、いよいよ細く分れながら、いよいよ組織を硬化させて行きました。そしてその上にのりかかつたバラモンは、ヴェダという經典を信奉し、その宗教的權威を以つて、政治・社會・經濟等のあらゆる面に權力をふるつたのであります。

釋迦は以上のようなバラモンの世襲的特權に反抗する中インドの自由を求める武士や、開放的な都市の商人などの活躍する社會に生れ、みずから王子の位をすてて貴族生活を否定し、自由な智性にもとずき、平等の愛情と慈善の倫理をとく佛教を開いて、廣く進歩的大衆の支持をうけたのであります。従つて釋迦の教團には莊大な祇園精舍を建てた大商人スツダ長者などもあつたが、奴隸のくみ取屋でも、賤しい商賣の娘たちでも平等に迎えられた。そして教團内では平等で、布施によつて得た財物も、極く僅かな私有物を除いて、皆が共有としたのであります。

しかしこの様な佛教教團の平等主義を當時の實社會に寫すことは困難であつた。それはインドの強いカーストという社會組織につき當つたからで、結局その組織の上に乗つたバラモン教は不動のものとなり、佛教は次第にインドの社會から浮き上る特殊教團の形となつて行つたのであります。たゞ佛教は優れた統一的思想を以つて、對立をやぶり、平等平和の世界を理想としたので、マガダ國の統一時代や、アショカ王の統一時代などには、いちゞるしく政治と接近して花やかな展開を見せたことは、しばしばあり、この傾向は佛教がインドから廣く東洋に傳播した場合でも、周知のようにインドのアショカ王時代などと同じように、佛教は、わが奈良朝や中國の隋唐時代に花やかに展開されたのであります。

これに對して佛教の庶民社會への滲透力は、インド程カー

スト的な強い階級組織のなかつた東洋の諸地方では、前に述べたように意外に廣く影響を及ぼしましたが、なおいわゆるアジア的封建的性格の強い東洋の現實の社會では、シヤカの抱いた高い理想はそのまま實現されず、歪んだ姿に於いて現われたことは、應報信仰が封建社會の現状維持、いわゆるあきらめ的な現實の肯定の方にもつて行かれ、如何なる不幸も現實の自分に何の罪なきにかかわらず、因果として正當化されて、凡べての現實を是認せねばならぬものとなつたのであります。

考えて見るに佛教の因果應報信仰は、バラモンのそれを佛教獨特の因縁論によつて再構成したもので、シヤカの説いた過去・現在・未來三世にわたる應報思想は、むしろ現在を未來にうつし出すもので、未來に理想を描いて、現在を精進努力して充實すべきことを教へたものであつたのです。従つてバラモンの輪廻の説は、佛教では元來一つの方便なので、輪廻は正しい佛教の修業によつて斷たれ、何人も平等に覺りを得ることが出来るということを教えるのが眼目であつたと考えられます。それを過去に一切をかけて、現實を既に動かし難いものとあきらめるといふことは、バラモンの因果信仰にもどつたもので、封建的支配階級が巧みに庶民にうけ付けた考方である、といわねばならぬ。

次に佛教の平等思想の實社會への展開について考えますに、前述べた通り佛教の平等主義は、さし當り教團内に實現

さるべきもので、それは宗教の世界に於いて止まるものでありました。ここにその限界があり、現代の共産主義思想などと相異なるものが認められますが、併しシヤカが個人として覺りの前には平等であることを教え、庶民大衆に深い同情をよせ、理想の社會が、教團にあることを示すと共に、更に何時かはこの理想を斗争によらぬ平和の教によつて現實の社會に生かそうというインド的な、非常に雄大な熱情をもつていたことは疑うことは出来ないのです。シヤカは我利・我慾のため、大衆を犠牲にしてかえり見ないバラモンの存在を強くしりぞけたが、同時に斗争によつて自己の獨裁的權力を築くことをいしました。

東洋の民衆が矛盾し混亂する世相の中で、バラモンの壓迫にたえかね、彌勒菩薩がこの世に降つて、かれらを解放し、明日にも平等の極樂世界が生れることを夢みたのは、無理もなかつたが、かれらが一旦それを暴力によつて斗い取つても、絶對愛と合理的計畫を缺いて、彌勒の淨土はついに現われず、再び矛盾と混迷の世界におちて行つたのです。

しかし私たちは徒らに永遠の理想を彌勒の淨土にかけて、空しく手をこまねき、平和論をとくものであつてはならない。現在の矛盾した二つの世界は、避けられない因果報應かも知れないが、戦争の輪廻は絶對に斷ち得ないものではないのです。民主的自由平等の平和世界を近き未來にかけて、あくまでバラモンの權力に屈せず、刻々現實の一つ一つの問題に努力精進することが、眞の東洋的佛教精神ではないか。

本會代理  
責任取次

## F. F. D. 幻燈機

F. F. D. 株式會社  
東京都港区  
芝田村三ノ七

### ..... スライド映寫機 (幻燈機) .....

◎ミナシキ58型B ¥12,880. 送料 ¥500. ◎マスターS50. B型 ¥11,880. 送料 ¥500.

### ..... スライド (フィルム) .....

- |                                         |         |
|-----------------------------------------|---------|
| ◎玉虫の厨子物語—法隆寺にまつはる愛と藝術の悲しい物語             | ¥ 460   |
| ◎早耳のうさ吉—早耳で得意のうさ吉が早耳の爲大失敗               | ¥ 430   |
| ◎おしやかさまシリーズ—全五巻、釋迦の降誕から一生描く             | 各 ¥ 430 |
| ◎白像の村—戦火に迫はれ砂漠をさまよう人々を救う白像              | ¥ 460   |
| ◎二宮尊徳—貧しき農民のため困苦とたたかう尊徳先生               | ¥ 460   |
| ◎アルプスの娘—ヨハンナスビリ作、汚れしらぬ娘ハイジのもの<br>のがたり二巻 | 各 ¥ 430 |
| ◎ビルマの豎琴(前、後)—文部大臣賞を得たビルマの豎琴のスライド化       | 各 ¥ 430 |
| ◎母を尋ねて—母を尋ねて三千里、海越へ山越へ少年マルコの話           | ¥ 430   |
| ◎幸福の王子—寶石と金で作られた幸福の王子が人々を助ける            | ¥ 460   |
| ◎白雪姫—美しい白雪姫がさまざまの苦勞が幸せになる               | ¥ 430   |

其他—作品300種、在庫豊富、目録進呈致します。

# たよりすぎてはいないか

## 村岡花子

前回は東大川田教授を訪ねて、色々と思想的な立場から佛教觀を聞いたのですが、今度は女性評論家として、又長らく児童並に母性教養に對するユニークな存在である村岡女史を煩わせた。

女史はずつと以前からラジオの小母さんで懷しまれる程児童文學の造詣深く、珠玉のよるな外國文學の翻譯紹介も數多い。児童、女性の上に溢れる程の情愛をもつて種々の著作や誌上に活動してきておられる。女性評論家にもやゝともすると、かさ／＼した理性一點

張りの面が、よく見かけられるのであるが、女史は、ふつうの家庭の主婦としての温かな氣持、そのまゝで書いたり話したりしている。そういう氣のおけぬ「小母さん」なのだ。「しばらくでしたね、今日はインタービューでしょう。難しいことは困りますね。何とか二人で妥協しちやいませんか」「いや」と中途半端な返事をして顔を見ると一向困つたようすもない。そこでメモをインタービューの鑑札のようにテーブルに置いて話を始める。

「一つ、クリスチャンであられる村岡さんに、佛教へのフランクリースピーキングをお願いしたいんですよ」

「そうですね。私は余り佛教に接する機會が、法事などを除いては少いので感想がましい事を云えないのですよ。強いて云いますと一寸法事にお参りしていても、なか／＼あの落着いた雰圍氣はいいのですよ、しかし、讀まれているお經がわかつたら、なおいいのと思います。バイブルも難しいですが、よく讀むとわかつて來ますし、最近でも口語譯等の研究が熱心に進んでいます、佛教の方でも、そのような方々がおありでしょうから、そうなれば、もつとよいでしょうにね。近代人は、どうしても「わかつた」という氣持が強いのですのに、其のさまたげになることは、どしどし取除いたらどうでしょうか」

「其點、痛感するのですが、現在法事等によく拜讀しますお經は、極樂のすがたとか、佛の大慈悲の現われかたとかを中心とするものなのです。和譯しても成程わかりませんが、

それだけのもので、も一つ、人々は、それにはどうしたらよいかという所をよく説くお経は平常は用いないものですから、内容を知っている人には、どちらでもよい、有難い氣持でおればよいという議論も出るわけです。しかし、追々と立派な譯が出来て皆が使うならわしになりますと、勿論其方がよろしいと思います。」

現在和譯經典の隆路は、佛教が多宗派で統一したものが持ちにくいことと、經典が主として法事に、僧侶によつて儀式として用いられていることによる。此が、講話に、信徒も手にするようになれば、道は開けよう。

「それに佛教はすいぶん難しい面がありますね、學問と宗教とは別に考える必要がないでしょうか。どうしても、宗教の中に學問が入りこんで難かしく理論づけると宗教本來の生命がなくなりますね。」

「その極端な反對の例が最近の新興宗教ですかね。」

と話は宗教一般に移る。

「まあ、そういうわけですね。私はもつと、かんたんなものゝが宗教だと思つてゐるのですけれど。つまり、宗教を信じているお互は、どうかすると、佛は最高、神は全能という言葉で、そのまゝ世間の上に移しかえて、宗教は万能、宗教心が無ければ何も出来ない、なぞと、どちらかというとうぬぼれた、こりかたまつた考になりやすいんです。社會事業だつて、別に宗教を信じていなくても、たゞ愛の氣持だけで立派にやつて行けるのですからね。又、今までは科學の發達してゐない時代には、とても宗教心を持ち、安心が決つていないと、不安で、わたれなかつた物事でも、科學の發達というか、知識の増大といひますか人の自信が増えて強くなつて、どん／＼不安なくやつていける。だから、本當に宗教というものは、そのような世間的な、いろいろな雜りものを取除いた奥に、かすかに光つてゐる何物かだと思ふのです。」

此間もね、友達のアメリカ人がやつてきて大發見をしたように、ミセス村岡、あなたは

クリスチャンですつてね。私は、エイジズム（無神論）よ、と云うのです。その方は、とても無神論者といつても、善い方なのです。不完全なクリスチャンの私とあまり變らない。不完全な宗教者より完全な無神論者の方がよい場合がありうるでしょう。人は良心を持つ以上、相當にやれるのが當然ですよ。宗教を思ひすごしてはだめね。

だから、例えていいますと、今日床に入るにしても、寢ている間に息がつまりはせぬかなどと心配すれば何も手がつかない。所が、今日ある如く明日ありと心安らかに眠るようなものではないでしょうかね。信ずる者の心安らかなすがたこそ強いものですね」

「つまり、ジョーキル博士が、翌朝目を覺ましたら、凶惡なハイド氏になり變つた、というあの話のようでは、困るわけですね」

「まあ、そうでしょう、むつかしい所にあるのでもなく、又、表面にそれと見えるものでもないですよ。それを極端に表現するとおかしい事になるんじゃないかしら。」

宗教は難かしいですね——」

と、ここで一寸話が切れる。難かしいという意味が單純でないだけに兩人考えこんだ所。いろいろな教義が峙つていて難しいのではない、それで難しいのなら教義の峠を越せば宗教の世界に出る。そうでなく、宗教は萬人に力とならねばならぬものだから、平明簡易に、これが宗教だと示すべきものからでありながら、其が、とかく今話しが進んだように高く／＼價值づけられて行方を失つてしまふ。捕えて、説明すれば宗教の青い鳥はいなかつたという事になる。常識的に宗教を絶對的無上のものなりという話よりも、今話してきた話の方が遙かに地についた感じがする。

「だから、うつかりしていると、宗教は、

全ての人々を救わなければならないのに、抵抗の少い階級に、最も壓力を與えていますよ。宗教は本來、人の心を自由に、解き放ち、のび／＼育つのを目的としていながら、どうしても教團を持ち、政治を持ちますと、政治に利用されて、下層の人々を抑えつけて政治

をしようという支配權力に同調する傾向が多いのです。下の人々でも、不平のない人もあるが中には不平の心も出るのに、これは、全て神の定め、おめぐみのしからしめる所だと、現状のまゝで満足させようという考を押しつける傾きが往々にしてありますよ。」

こう話を聞き乍ら、徳川期の日本の宗教界を思い浮べてみると、成程と思う。徳川家の紋章の下に育つた宗教は、決して支配者への反逆者ではなかつたにちがいない。勢力を利用するのは悪くはないが、本來四姓平等を唱える教が、權門に阿ねる習を作つた事は今に反省すべきであらう。佛教に限らずキリスト教はじめ、すべての宗教の乗ぜられる弱點である。

「又、反對に、下の者、というと變ですが無産大衆にも利用されるのです。今の平和運動にしる、誤解を招く點を、知らず／＼に作つていのではないでしようかね。」

全く、宗教は、有産・無産・萬人を満足させるものであるが、其自體、獨自の社會政策

を持つものでないから、どれか一つに利用されると他を壓迫する結果になる。宗教本來の面目を自省すべきだと思う。

「しかし、佛教はあのインドから起つたわけですが、インドの詩は實に美しいですね。此間も、インドの大學の副總長をしているラトナムさんから聞いたのです。サンスクリットで詠じられる時、わからないけど、わかりますよ。調べですね。又、英譯して下さつたのですが、實に内容が豊かで、含みの多いものですね。そうじゃありませんか」

「えゝインド民族はふしぎな民族で、文學のない何千年もの昔の發音や、アクセントをそのまゝ今に傳えているのですから、ふしぎなものです。日本などからみると、シナも仲々大きな國がらですが、インドは更に芒洋とした大きさを感じますね。」

「お子さんをアショカ／＼と呼んでらしたですよ」「それは佛教王、阿育王と同じ名ですね。いや、今日ここで、なつかしい名前を聞くとは、面白いことでした。」

# 鹿野苑に想ふ

藤 吉 慈 海

(ベナレス發)

眞野さん、貴君にお目にかかつたのは去年の夏でしたね。先生はその後お元氣ですか。お腹を悪くして寝てゐられた先生の枕もとで、色々と海外生活についての御注意や御希望を拜聴し、且つ私の書いた「蠅田本眞尼」についての御感想等を承つたのはつい先頃のような氣がいたしますが、もう半歳近くなりますね。あれから私は九月二十二日夜羽田をたつて沖繩・香港・バンコック・カルカッタと暑い國に向つて飛行を続け二十六日に目的地ベナレスにつきました。そしてこのインダーナショナルハウスに止宿し乍ら哲學特にインドに於ける宗教生活の研究を續けています。インド政府は毎年留學生を各國から迎へて毎月二百ルピーの給費をして勉強さしてゐます。昨年は私が一番おそく到着して六十三番ですから大體その位の學生がインド政府からスカラシップをもらつてゐるわけです。この外にもビルラさん等の給費生やその他の給費生もあるやうです。そしてインドからも英米へかなりの學者や學生が研究に派遣されてゐるやうです。最近ではアメリカの學者達も研究旅行に來てゐます。

私のゐるベナレスは御承知のやうに昔カーシーといつた都、古くから文化の一中心地であり現在でもインド古代文化研究の一中心地となつてゐます。したがつてこの町にはインド教の寺院が澤山あつて、特にガンヂス河の西岸には大小様々の寺院がたちならび、インドの各地から巡禮者の集るところです。ガンヂス河に舟を浮べて立ち並ぶ寺院を眺めるのはインド旅行者にとつて一つの偉觀で、現在ではインドに於ける名所の一つといつていいでせう。私が自らえらびました「インドに於ける宗教生活」といふ研究題目にしたがつてこのヒンズウ大學に學籍をおくやうになつたのも、このベナレスがインド教の中心地であり、ベナレスヒンズウ大學がインド哲學やインド教研究の中心地であるといはれるからでせう。この大學にはインド哲學を研究してゐる者は私の外にアメリカからビルラ氏の給費生が一人とハワイから支那系米人が一人來てゐます。この外サンスクリット研究に二人のドイツ人が來てゐます。インド人の哲學や宗教に對する關心は一般に非常に強く、哲學專攻の女子學生もかなりゐます。ベナレ

スにはこの大學の外にサンスクリットカレッジやチャイナ教の研究所等もあつて、流石に古い學問の傳統を誇つてゐます。

なほベナレスにとつて忘れてならないのは、その郊外にサールナート（鹿野苑）があることです。サールナートは佛教徒にとつては懐かしい釋尊初轉法輪の聖地で、全世界の佛教徒が一度は訪ねてみたいと思ふところです。サールナートへはベナレス町から東北へ綺麗な自動車道路が通じてゐます。大きな榕樹の並木道を人力車に乗つて約一時間ばかりゆくと、道の左側に榕樹の蔭から五比丘迎佛塔といはれるチョウカンデイスツウバがみえそめます。この塔は土と石とのかたまりで出来た大きな塚で、その上に煉瓦の塔が建つてゐます。私ははじめてこのサールナートを訪ねた時、この迎佛塔に詣でその近くの榕樹の蔭に汗をふき乍ら一休みいたしました。思は遠く釋尊の昔にかへりました。

華やかな王城に於ける生活、それは何不由ないものではありませんでしたが人生に於いて眞實に求むべきものの何であるかに氣付いた若き日のゴータマにとつては、もはや耐えられ

ないものとなりました。そして苦行者の群、禪定主義者の群こそは俗世を捨てた聖なる生活者の群として多感な若き日のゴータマの目に映じたことでせう。しかし王城を出でて自らその修行者の群の中に身を投じたゴータマは彼等の求めてゐるものが人間の求むべき窮極のものではないことに氣付きました。それは自らの修する禪定生活の安易になれて人々を救済する智慧を磨くことを忘れてゐる人達の一群でした。そこで彼はこの禪定主義者のもとを去り苦行者の群に身を投じてみました。しかしここでも同じ様な體驗をしたのみでした。徒らに肉體を苦しめることがどうして解脱への道でありませう。そこで彼はこの苦行林をも去つて身體の恢復を待ち、自ら人として眞實に求むべきものをひたすら追求してゆきました。この苦行林を去りゆくゴータマを墮落者よ落伍者よと冷眼視する五人の比丘達がありました。彼等をはじめから彼と共に禪定と苦行とをつづけたのですが、苦行林を去り行くゴータマの心を知るに由なき人達でした。

それから彼はブダガヤの菩提樹の蔭に堅い

決意をもつて深い禪定の幾日かを過こしました。一夜曉の星の輝き一入勝る頃、ついに心の闇はひらけいまや覺者となつた彼は自らの使命の重大さを深く自覺いたしました。そして目覺めたる人、覺者となつた佛陀は苦行林に修行を續ける五人の比丘達を教化せんとサールナートへ來られたのです。ところがこの五人の比丘達は墮落せるゴータマと思ひしに近づいて來られる佛陀の靜かなおちつきと、目覺めたる者のみの持つけたかさに思はず大地にひれ伏してこれを禮拜したのでした。五比丘迎佛塔はその土地に建てられてゐるのです。私はこの地、この石が釋尊のみ足にふれ説法のみ聲にふれたことであらうと思ふとあたりの一木一草も懐かしく、この聖地に住む比丘達とも一入の親しさを感じたことでした。

このサールナートには今から二十年前セイロンの佛教者ダンマバーラ師のひきいるマハーボディソサエテイの力によつてムーラガンダクチビハラが建立せられました。この寺を日本では初轉法輪寺と申してゐますが、石造の立派な寺院でこの寺院の内壁に釋尊一代

の壁畫をわが野生司香雪畫伯が雄渾な筆致をもつて畫いてゐられます。

なほこの寺の創建に協力した日本佛教聯合會は更に日本製の梵鐘をこの寺に寄贈してゐます。その梵鐘は入口に高くつるされてゐて、世界の各地から來る參詣者によつて撞かれてゐますが、その懐かしい梵音は私にとつて故國を偲ぶ何よりのよすがともなります。

サールナートにはこの外にも支那寺やビルマ寺やジャイナ教の寺院も近くにあり、無料施療院や小さい乍ら佛教圖書館もあります。

尙アシヨカ王がこの土地に詣でて建立したといはれる有名な圓柱は廢墟となつた僧院趾の近くに建つてゐます。その圓柱の上につけられてゐた飾は有名なアシヨカチャクラと呼ばれる法輪の上に四匹の獅子を彫んだものですが、これはすぐそばにある博物館の中央にその堂々たる美しさを誇つてゐます。

獨立を勝ち得た近代インドはこのアシヨカチャクラをその國旗の中央に掲げて正法による政治を象徵してゐるかのやうです。かくてインドは世界平和の根源とまで言はれてゐますが、現地にみるインドは後進國の常として

色々と多難な問題が複雑にからみ合つてゐるやうです。

私のみるところではインドは既成的宗教に淫せられてゐるといつてもよいのではないかと存じます。この言ひ方は餘程注意しなければなりません。近代インド建設の上にはこの宗教の問題が大きな課題となつて來ると思ひます。ネルー五ヶ年計畫では、經濟問題やコンミニュナリズムの問題が先になつてゐるやうですが、それらの問題ともからみ合つてインドに於ける宗教の問題は非常に複雑で、近代インド建設の上に宗教の果すべき役割が果して何であるかを深く自覺してゐる人は爲政者の中にも宗教人の中にも非常に少いのではないかと存じます。

眞野さん、こんなことを考へてゐると古代インド哲學の研究も、新しい課題を提供してくれます。それにしても日本の宗教界は如何ですか。レスター女史がインドへ來て日本の平和運動についても報告をしてゐました。「淨土」につらなる念佛者の教團は新しい日本建設に對して何の貢獻をしてゐるでせうか。念佛者の教團に歴史の進むべき方向をみさだめ

得る宗教者が何人ゐますか。若き日のゴータマをして歎かしめたインドの教團と同じやうな安易さに馴れきつてはゐないでせうか。いやこのやうな問題は「淨土」の同人の方々におまかせ致しませう。貴方のお便に動かされて、このやうなつたない通信を送ることになりました。どうか先生はじめ編輯同人の方々にも宜しくお傳へ下さい。(二月十七日)

**しびれた足** 長く坐つてしびれた足の足先をいくら揉んでもなかなか直らない。夜中に眼が覺めてみると、片腕から手さきがしびれていることがある。そのしびれた手さきや手首を揉んでもなかなか直らない。この時には、このしびれた脚や腕の根元に近いところに着物のひだで壓迫された痕跡が赤く印銘されているので、そこを引つかき摩擦すれば、しびれは消散する。病氣も自覺症狀の所在とその原因の所在とちがうのがある。人の心や社會の病にもこんなものがある。異常を「感じるところ」より「感じさせる根源」をつかねば直らぬ。

# 浄土有縁の人々 (五)

藤井 實應

(十二月十二日) 茨城縣石下町邊りは廣々として、さすが關東大平野たるを思わしめる。東北にあたつて筑波山が見ゆるだけで、村落もまばらである。筑波山は辨榮上人が二十四歳の頃二ヶ月にわたつて念佛三昧を修せられたところと聞く。廣汎深遠な光明主義體系も、この山、この平野と關連あるものと思われてなつかしまれる。石下驛に中島、山中、中川諸氏に御見送りをうけ。下館に向ふ。井狩平九郎さんの御店、八幡屋本店へ。お店は吟聲というお酒の醸造元である。三十年前からの共生の同人で、御家族は近江八幡にあるとのこと、店にも共生全國結案に参加された方三名あり、井狩さんと私と共に五名御馳走を頂きながら語る。私はお酒は余り頂けないのだが吟聲というおつくりになつた美酒なので、思はずたくさんに頂いた。共生のこと、禪と簡易生活、佛教と青年等のことなど話につきない。慶應御出身、近江商人としての微細精密な觀察は商賣以外の道にも及んでおり、いろいろと教化の實際に就ても氣つかせられたところがあつた。こちらえはじめて寄せて頂いたのであるが、この後とも御都合よろしき時いつでも寄つて泊つてくれ、教えられまして有難いところこんで下さる。男世帯で不行届で、と申されながら實に行届いた厚遇を忝うする。つくすこと少くめぐまるゝこと多き自らを省みる。

## 美作國誕生寺に

おまいりして

鵜飼 ふさ

昭和廿六年は私にとつて最良の年でした。それは、一生の中に一度は、と念願して居りました美作の國宗祖の降誕の地、誕生寺に參詣の出來た喜びでございました。

岡山から津山線に乗り替へ約一時間余で、誕生寺驛に着きます。下車して家續きや田甫道を歩るく事數分、左手、山の麓に大きな、建物が見えます。途中小さな川がありますが橋の名も嬉しいねんぶつ橋。昨年の浄土暦にありました誕生寺の寫眞を思い浮べながら山門を入りますと左方に、法然上人お手植の

(十二月十三日) 松戸市五香善光寺(山崎辨誠師)へ着いたのは午後二時頃であつた。この寺は辨榮上人草創の道場である。山崎辨誠師とも深き御縁あつて現在法類となつておる。こちらさえも幾度泊めていただいたことやら、辨誠師が、この寺へ別時念佛等に來た人の記念帳の古いのを出された、するとそのトツプに大正十三年十月十三日より十八日までとして神谷學周、岩品誠去兩君と共に私の名が私の筆で記してあつた。すでに二十九年前のことである。ソバ粉を持參して茶サジ一杯一食で一日に三回、朝五時より夜十時まで念佛、其間食事の時三十分、午前、午後一回づつ十五分休憩あるのみで六日間にわたる別時念佛を修した時のことが思ひ出される。神谷君はすでに西化せられた。岩品君は現に松戸光明教會主、今昔の感にたえぬものがあつた。

山崎辨誠師はもと西山派の僧であつたが、辨榮上人の弟子となり、上人に長く師侍し、善光寺の跡を嗣がれた方である。辨榮上人の片影等の著あり、辨榮上人に就てのお話を承ることができなのが特に有難い、お話を聞いて光明會の現状は辨榮上人の主義を余りに小さくしているのではないかと思はれる。奥さんも辨榮上人の教を受けられた方である。古宮一郎さんが、藤井さんはまだ來られぬかと寺へ昨日から度々使をよこしてはたづねられた由、まもなく「待つていましたよ」とやつてこられた。古宮さんは現在農に従事しておられるが、なか／＼の讀書家で「往生要集」や「楞嚴經」をわざわざ東京の神田まで求めにゆかれる熱心家で、且は神秘的な體驗をもつておられる方である。法然上人讃仰會から出た一枚起請文を読んだこと、一枚起請文と光明主義とを如何に見るかなどの質問あり、また、道理の上ではよく分つてゐるが、時と場合によつて怪しい心が起きるのをどうすることも出来ぬが、死ぬまではなほらぬものであらうか、どう處置してゆくべきであらうかと、深い心の反省から出る實際問題を提出される。三人鼎座、話がはづんだが、短かい日は早やくらくなる。夜は清野さん夫妻はじめ近隣の熱心な光明主義信者の方々が集まられ、禮教儀により念佛一會終つて暫く「念佛者」について語る。座談となつて、古宮氏の

銀杏、といふ立札があり大きく枝を廣げ枝もたわ／＼に實がなつてゐました。先づ境内の、左側にある二幡の棕の木を、無量の思ひで眺め、かたわらにある御兩親の尊廟を懇ろに、合掌しました。

ついでにお寺に來意を告げました處、幸ひに漆間貫主も御在宅でしたので、幾間も廣いお部屋を通り大廣間に御案内頂き、お美事なお點前のお茶を頂き乍ら種々御縁起を伺ひました、宗祖の御誕生も此の地、御父時國卿が定明の爲に憤恨の刃にあい御遺訓を残されたのも此の地、叡山に登られる爲母君と悲しい別れをされたのも此の地、お館をお寺に直されました由、等お話を伺ひました。

見渡しますと随分廣いお座敷がありますので、多數の團體も受入れられる事と思ひます。宗門の定紋、佛畫、の襖は私には印象深く思ひました。

勾欄からお庭を眺めますと、山を背にした自然の中に人工を加へて麗はしく、清寂、其のもので寛の流れの水も、遠い昔の御遺訓を物語つてゐる様な氣がしました。

それから讀經の中に、お木像の御開張をい

ユーモアたつべりのお話に爆笑したり、或は聖歌を共に歌つたり、聖き夜の更けゆくのを樂んだ。

(十二月十四日) 茨城縣北相馬郡文間村圓明寺(大竹智海師) 慰靈祭法話、朝、山崎辯誠師の御見送りを得て、六實より乗車、柏、我孫子を経て、布佐下車、一里余を歩いて圓明寺へ。午後一時より記念碑の前に讀經回向後、本堂にて法要、終つて法話、「戦没英靈を慰むるの道。日本の佛教徒として。世界の平和も家庭の平和から。おがむことゝ仕事が一つになること」などお話する。今まではおがむことゝ仕事は別々に考えていましたとお話承つて氣づかせてもらいました有難う御座いましたと後から申し出られた方もあつた。大竹智海氏は文間村保育園の園長をし、奥さんはその保姆をつとめられている。御母堂(故智憲上人未亡人)も御丈夫。村の様々の出來事も御住職に相談に來られる。教化に寸時の暇もない忙しさである。

(十二月十五日) 天氣晴朗で、廣々とした關東平野の朝ぼらけの田舎道を、一人にて念佛を友として歩くのは誠にうれしく有難い。布佐まで一里余を歩いて布佐を八時四十分發、東京鷲谷に着いたのは十時過ぎ、東成出版社に出版の件で一寸立寄る。岩野眞雄氏が「これからどちらへ」「小田原へ」「小田原のどこ?」「本誓寺の勝義賢先生のところへ約束があるから」「勝先生もなくなられたさうだね」「エッ!」と私は驚いた。人まちがひではないかと又聞きなほしたが、事實らしい。十二時東京驛發、本誓寺へ二時頃着く。門前に張紙がしてある。今日御通夜、明日日本葬なることを知つた、玄關に入れば、娘さんが出て來られて、父はあなたのお越しを待ちぬいていましたと後は涙である。奥さんも「どんなに今日の日を楽しみに待つていたかも分りません」と泣かれる。全く夢である。今日(十五日)午後二時頃から能化の方々に出來るだけ集まつてもらうて信仰教化に關しての肩のこらぬ座談會をするから泊りがけで來るようにとの御便りで、その約束の日時に來て見れば、先生はすでに此世にあらず、すでに十日に遷化、十二日に密葬もすみ、今日

たゞきお側近く合掌いたしました。

上人御親ら刻まれたと言はれるだけに、

活々としたお姿に、何かこう御挨拶を申上げ度い様な、また、お言葉を、下さりそうな、何とも云ひ様のないお懐かしさで唯々、感激のお念佛そのものでした。

續いて寶物をも拜觀させて頂きました。上人に關する色々のお品がありました。中でも善導大師御影のお身體の線が、悉く細字のお名號で實にお美事に書かれてありましたのは感深く、また、片目のお魚の大小が酒精漬にしてありますのは珍らしく思ひました。

時間も迫つてまゐりましたので、惜しくはありましたが、數々の記念品の中、銀杏の實をも頂きお暇して外に出ました。どうぞ生へます様に念じながら。

團體として、廣島縣の方から眞宗の方々がお師匠様の御生地だから、とてよくお詣りになるそうです、わが淨土宗の方達も、吉水の源たるこの靈地に、多數來拜されます様、おすゝめ致します。

は御通夜であると。今夜は能化の方も、檀信徒の方も集まれるから一言法話を願えれば、故人の願ひも叶ふからとの奥さんや、鹽竈義勝さんのお話によつて御通夜をさせてもらうことにする。

勝義賢先生には京都の東山中學校で漢文を教えて頂いたが、當時私の所謂苦學の模様もよく知つていて下さつた先生である。その後宗務所に勤務していた時、勝先生は芝中に教鞭をとられ光照院に宿泊しておられたが、私は渡邊海旭先生の御世話で勝先生の隣りの室に暫く住むこととなり御家族の方々とも親しくさせて頂いた。終戦後心にかゝりながらもおたづねもせず御無沙汰していたところ、十月に御手紙を頂きそれから封書ハガキ數通頂き、こちらからもその後の事情も申上げたりして、十二月十五日に御うかゞひすることとなつたのである。幾度も手紙やハガキで楽しみに待つていると申し越られた。私もまた同じく今日の日をどんなに楽しみにしていたかも知れぬ。先生から頂いた御手紙の一節にも

「芳翰拜承久々の事、きよちやん二つ三つ位か寄宿舎時代か私の室の障子を指先で破つて居た事、當時を思出して懐かしく、それが早やお嫁入りしたといふので、ぢよいになつたも無理からず、愚老も頼に老耄物語れば一夜で盡きず、十二月には緩るゝ来て下さい、宿泊して貰ふて冬の夜長がを積る話でつぶしたいと思ふて居ます」とあり、又その後ハガキを四通も頂いており、

「十五日には御一泊の豫定で御越し下され度久々今昔談もしたく楽しみに待つて居ります」

「茨城から時間どれだけかゝるか知らぬが當日は朝來待つて居ますおふくみまでに」  
「十五日は午後二時までといはないで茨城から能ふ限り早くお着きになる様に朝から待つています。時間ギリギリ御苦勞です——御早着は午前中必ず待上——短日ですから——」  
頂きし御ハガキを改めて拜見し、そんなにまで待つて頂きしものと思はず落涙する。

## 櫻 ち ら く

中 野 善 英

▽男ばかり女ばかりの世なりせば、よからぬものと思う日のあり。

▽いつ死んでもいゝと思うて居るものゝ、死んではならぬ時ばかりなり。

▽せねばならぬ事は一つもない。而しせなくていゝ事は一つもない。不思議なお力で不思議に生きる。

▽好きなものが一番コワイ。好きなもので縮尻る。好きな者に亡ぼされる。

▽愛は與へる程、殖えるー。

それは相手から與へ返へされて手持が殖えるのでなく、與へる事に依つて益々新鮮な愛が湧き出て増へるのです。

## 花まつり



## 眞野正順

鬱蒼とした白金の火薬庫の前を過ぎる。その頃、まだ鄙びた目黒街道から、低い水田を越えて、彼方に高い樹林のなかに、大きな寺院の屋根が點々と見える。それは、今も「下やしき」と通稱される。芝増上寺の別院跡をかこんだ一群の寺院部落であつた。

毎年、春もまだ寒い薄日がかつた一日がくると、街の群童達の小さな草履や素足は先きを争つて、麥島の細道を駆けぬけ、その寺々の門に、とびこんでゆくのだ。

「清岸寺」と彫られた横額もいかめしい屋根門の内はすこし石段を下つて、あたり刈り整へられた庭樹の中を、正面の本堂へと白く石敷が光っている。その眞ん

中に一つの組台がおかれ、花を飾つた小さな屋根の下に、ほの／＼と湯氣のゆらぐなかに、あの、天を指し地を指す、可愛く黒い誕生佛が立たされる。

それを取りかこんで立つた群童達の眼は圓く、まづ、その屋根を葺いたさま／＼の明るい花の色に吸いつけられる。蕭條としたこの季節に、どこの叢

にも、木蔭にも、こんな美しい花は、まだ見たことがないからだ。それから裸佛の立たす盤池に湛えられた水から、あがる湯氣を見つめる——もう、誰れか、氣の早い子が、供えつけた拇指ほどの小さな柄杓で、その湯を佛の頭に浴びせたかと思ふと、そのまゝ唇にあてゝ、ごく／＼飲んでゐる。

もう、あとは、てんやわんやである。群鳥のような叫聲をあげて、柄杓を奪いあいながら、ごく／＼飲めるだけの甘茶を飲む。

その混亂のなかに揉まれていた、一ばん稚い草履の兒も、今はやつと柄杓をつかんだ。

それが、幼き日の私である。

—喉を通つてゆく、なま温く、うすい、甘茶の味。

そらいふ事の多くも、いまは、忘却の霧のかたに次第に薄らいでゆく、慕かしい記憶である。あの早春の空の下に、目を驚かす屋根の花や、いくらでも倦きるほど飲ましてくれる、あのうす温い茶の甘さは、いつまでも、私の心の奥底に残つて、豊かな春の喜びを思ひ出させてくれる。宇宙萬物を萌え咲きそめる春の潮は、いつも、あの、天地を指す童子の池から溢れてくるのではなからうか。そう云ふ氣持が、私のどこかにしつかりと喰い入つているのである。

○

明治三十幾年かだつたろう。父が町から買つてきてくれた「少年世界」の表紙をめくると、一葉の口繪が目についた。どこか異國の一室らしい中央に、うづ高い花にかこまれて小さな誕生佛が安置され、それを圍んでフロツクコートもいかめしい大勢の日本人が、儼然と列んでゐる寫眞である。その中の目立つた處に、當時洋行していたわれらの「おちさん」巖谷小波氏がカイゼル髯をぴんとはねて力んでござる。—あとで話

を聞けば、その中に姉崎先生や、海旭先生の顔も見出された筈であつた——

説明をよむと、その頃、伯林に集つた留學生達は、あちらの賑かなクリスマスやイースターの向うを張つて、こちらは大いに四月八日を祝ふ氣になつたが、釋尊降誕會ではどうも抹香臭いといふので「花まつり」と名をつけて、碧眼の知己友人なども大勢招待して、大いに陽氣な一日を騒ぎ暮らしたのだそうである。

ところが、こうして初まつた「花まつり」の名は、奇しくも、その後本國に傳へられ、「降誕會」に代つて、やがて、年に歳に、全國の各所に繰ひろげられる華麗な、祭日の名となつてしまつたのである。



# 宗教界は今のまゝでよいか

NHK放送討論會  
於・大正大學

増上寺法主 椎尾 辨 匡

天理教東京出張所長 大須賀 貞 夫  
日本宗教連盟理事

評 論 家 龜井勝一郎

司 會 河 西 三 省

**司會** これは宗教問題の検討であつて宗教家にとつては深刻な問題である。現在の社會の不安に果して光を與へているか、人々は宗教に感謝しているか、又宗教家は如何様に救ひを與へようとしているか、果してこれが與へられているか。宗教は傳統の中にとち込みすぎていないか。宗派の多くはどうか、既成宗教は新興宗教を如何に見ているか、又果して宗教家としての役割を果しているか、壇家の壓力におされて墓守葬式にのみ終始して

はいないか、これらの問題を取りあげて宗教が健全な慰安を與へているかを論じて戴きます。

**椎尾** 宗教はそれぞれの時代、人生に深い根據をもつてゐる。現代のように最も不安の多い時代は勿論である。佛教が印度で數千年前相當正しくのびたが、保守的な力が強くて充分にはのびなかつた。日本では聖德太子以來のびて來たが、明治に至つても充分のびなかつた。佛教が皮を脱いで血となり肉となつ

てはいない。新日本の進運とともに新しい力が要望される。新興宗教について多くの人は迷信だといつてゐるが、いゝ所もある。更めるべき點は更めるやうにしたい。又宗派の分裂も何らかの改新を求めるもので、新しいものを表はすものである。日本の宗教として一番大事な問題は戦争に注意するのも必要であるが、戦争をとめることが現實の問題である。宗教界を新しくするには多くの人を必要としない。今後の問題は世界の平和を建設することにある。過去にかけていた人生建設に大事な目標を與へることである。社會教育產業の指導精神を作ることにある。

**大須賀** 宗教界は今のまゝではいけない。

私がこゝにとりあげて云ふことは既成宗教についてである。既成宗教が今日最高發達の限界に達したというのではない。時代精神が今までになかつた特性をもつて教團が發達して來、教團の形としてはこれ以上發達する必要がないまでに發達した。しかし教團は教團設立の精神を忘れてゐる。宗祖の時代に作られたものはその解釋には餘すところがない。その解釋は時代の變遷につれて變つて來たが果して現代に生きてゐるであらうか。宗教個々の本質をかへて社會に順應させてはならな

い。宗教の中に社會を入れなければいけない。發洩たる信仰の光を燃し續けてそのために働かなくてはだめだ。教團のために信者はあるのではないが恰もそのやうな感をうけるのは多くの既成宗教の現實である。宗教學者も過去の宗教を求めそこに安全地帯を求めてゐる感がする。もつと現實の問題を捉へて如何に發展すべきかを論じなければならぬと思ふ。かゝる現實の状態では教團も信徒に離れられ、經濟的なゆきづまりに直面して、死滅の道をたどるものである。

**龜井** 私は一佛教徒であります、私の知

つてゐる伽藍佛教は絶望である。しかし坊さんの全部が全部さうだといふのではない。若い坊さんの中に新しい意志をもつてゐる人がゐるのを知つてゐる。しかしその人達はそのやうなことはよく知つてゐても、やがて普通りのものに引きづり込まれてしまふ人が多い。現在若い人々が佛教に何の魅力をもつてゐないのは、佛教が現代の文明に何らの批評力もないところに缺陷があるのである。これは經文を現代文にかき直した位の程度では駄目だ。今東洋的なものは西洋ヒーマニズムの前に劣等感をもつてゐる。東洋のものをもつて西洋に眞正面に何故かを發して、あれかこ

れかと對立しなければならない。對立ということは權力であるが、その衣は烈しい人間性である。しかし東洋ではこれを對立とは云はない。無分別をもつて、小さなことでもなんでもなすべきである。南鮮北鮮の區別なくして醫藥を送り、とぼしいながらも衣服を送り、フィリッピンその他の國などに送り倫理的な愛によつて、自分の宗旨の宣傳ではなく、新しい潤達な響きを出さなければいけない。そのためには今までの佛教は絶滅しても差支へない。絶滅したところに新しい宗教の芽が出てくるのではないか。

**推尾** 三人とも現實を破つて進まなければならぬといふことに於ては一致したやうだ。その見られる度合、立場は同じではないが、社會を宗教の中に吸収しなければならぬのには賛成である。今後の教育、産業生活に伴つて、宗教はそのまゝ教育産業に一致するものと考へられる。これを妨げるものは破壊されねばならない。人生の中にびつたりと入り込まなければいけない。例えばこの大正大學が示してゐるやうに、これで足りるか、もつと指導力になるものを、人生社會と吾生き抜かんとする強い信念をもてるものを作らねばならない。教團に固執するのではなく、吾

人生を生き抜かんとすることである。

**大須賀** 龜井先生が絶望感を抱いてゐるようですが、私は必ずしも絶望をもつてはいない。既成宗教の宗祖なり教祖なりが生れた社會基盤を觀察すると古いものから新しいものに移ろふとするとき、改新の指導者となつた人達で、その人格なり識見なりに感じた人々から、それに連なる教團が出て來たのである。従つて私はその時代にかへることが新しいものを生み出してゐるものと考へる。今の教團という衣を脱皮して新しく出發したらどうか。

**龜井** 私の申し上げることは先程云つたこととで盡きていますが、私の云つたことは教團の腐敗したものが亡びてしまつたら、新しいものが生れてくるという時代的な絶望である。私は佛教徒といつても宗派に屬してゐるわけではないから、第三者として云ひたい事も云へるが、宗派の中に居る人には今後の宗派はどうしてやつていこうかといふ心配があると思う。宗派には自分勝手なところがある。それを純粹に維持してゆくには宗派の中から生れてこなくてはならぬ。現在イソテリと呼ばれてゐる人達は皆さう考へてゐる。又私は文盲と云はれる人の信仰に大いに

期待をかけている。これらの人々はほんのさ  
ゝやかな力で信仰を力づけている。

**司會** では質問討論會に移ります。

**學生** 既成教團が何ら現代の宗教に意力を  
もたないと云はれるが、それを打破してゆく  
天理教の抱負について

**大須賀** 既成宗教の全體を云うのではなく  
て、腐敗しているものについてであるから、  
天理教については答へられない。天理教は宗  
祖に生きているだけです。

**教員** 教團解體は現實に可能か

**大須賀** 考へ様によつては何んでもない様  
なことと思う、宗祖が道を説いて弟子が出来  
それがだん／＼組織となつていつた。その組  
織が宗教的な集團の意力特質を發揮している  
ならば解體する必要はない。教團の中で信仰  
を忘れ、本末顛倒すれば解體しなければなら  
ない。今誰がやるのだという事になると、一  
つの方法としては、その教團に連なる青年に  
期待したい。何んでも反應を示すのは青年で  
ある。宗祖の精神にかへり、信仰の情熱に結  
束してこなければ解體である。

**龜井** 教團の解體は外部から力を加へるの  
ではなくて、それらの教團は自然に解體する。  
教團の中も悪いが、信徒も悪いのである。折

角よい坊さんが來ても、傳統に固執して坊さ  
んを引きづつてしまふ。それは一つの信徒の  
虚榮心である。私は門徒ですから、門徒のこ  
とについていくらか知つてゐるのだが、結局  
それは門徒なり信徒なりの虚榮心なのであ  
る。従つてこれらの考へを直さねばならな  
い。佛教は情性に情性を加へて、今情性でも  
つてゐるに過ぎない。

**推尾** 教團は自然に破滅するものはさせ  
る、權力をもつて解體させることは一番まづ  
いことだ。それ自らが純眞な、健實なものを  
もてば亡びるものは亡び、生きるものは生き  
る。佛教は生きる方へ轉回する。それは強い  
力であつて、解體というの弱い力を現はす  
ことである。

**商人** 健實な生活に生きた指導原理となら  
なければならぬ。佛教は現實の何ものへも  
適合させようと思う。佛教について二つばか  
りにとどめるが、一つは僧侶の世襲問題、こ  
れが佛教を形式化し、觀念化している。僧侶  
が余りいて生きていけなくなる。もう一つは  
宗派の分立についてであるが、多くの宗祖が  
いて、教團が出る、その中から分派するのは  
感情の對立とか名譽欲にある。こゝに佛教の  
缺陷があると思う。

**龜井** 賛成です。これからの佛教をどうす  
るかというのは非常に難しいものである。現代  
ヨーロッパの對立と、その困難の中で佛教を  
生かすのは困難である。心の斗ひの中でやつ  
ていかななくてはならない。

**學生** 經濟的な貧困が信仰の貧困を來たす  
か。

**大須賀** 教團經營の根本義を忘れてゐるか  
ら結局さうなる。

**醫師** 光は科學の光である。三人の話には  
健康ということが一言も云はれなかつた。醫  
學はゆきづまつてゐる。宗教を發展させるに  
は、醫者であり宗教家であるものでなければ、  
健康と平和とがない。健康がなければ宗教は  
ない。

**龜井** 日本では古く佛教徒であると同時に  
醫術をもどこした。佛教と醫術とは密接な  
關係がある。醫學の面を充分に重要視して來  
た。今でも病院や學校などを經營してゐると  
ころが多々あるのである。

**推尾** 科學尊重の精神を云はなかつたとい  
うが、教育と産業とに力を入れて説いた。こ  
れは殊更科學と云はなくとも科學を含めてい  
るのだ。醫者は肉體的なもので、臨床心理的  
な醫者を設けるべきだ。

**學生** 現在の信徒と寺とを離れさす原因、

世襲と壇家との違ひ。

**推尾** 世襲は一定の方法とすべきではない。それが一般化していれば、世襲によらない寺をどしどし立てて行かねばならない。檀徒制度は明治のやりそこなひで、これは自然に壊滅してゆく、それは完全な信徒制度になればよいのだ。

**商人** 現在の宗界は教育、産業界にとけ入っているというが、宗教界の人達は居眠りをしていのではないか、官公吏の汚職など、種々なる事件に黙っているではないか。

**推尾** 宗教界に人なしと見るのも一つの見方である。私は遺族の問題には關係しているし、親や子の念願であれば、どこまででもゆく、それは親や子を生かすことである。各位が眞心をもつて立つていることを感謝する。

**商人** 今日の宗教界は全國の寺院の生活の維持に汲々としている。そのためには線香の煙でなでたり、護摩を受けて商賣繁盛だと邪道におとされた人民はこの寺院の經濟的な苦惱の犠牲になつてゐる。これは宗教家の無氣力によるのではないか。

**推尾** 宗教家という中に寺院の僧侶も含まれているからこれを認めざるを得ないが、本

當に信念によつて活動するものと、行事をする寺院と區別をしなければいけない。寺院なり宗教家なりを活動に動かすことが必要である。宗教家が宗教教育、學校教育、家庭教育、乳兒、幼兒の教育をするのが最も適當である。教育といつても過去の教育形式に期待するのではなくて、新體制の教育に期待するのである。護摩札を與へる人も與へられる人も、もう一段宗教生活に進まなければならぬ。

**商人** 教育に宗教をおり込むことは分つた全國の寺院などで行はれてゐる宗教的教育の力は微々たるものである。教科書の中にとりあげてあつた宗教的なものも、それが民衆にどれだけよい結果を與へたか疑問である。現在の六三制の教育の中で宗教家が民衆のためにどれだけ努力をしているか、護摩札をもつてゐるから吾々は救はれてゐるのだという大衆の無知を安閑として見てゐるだけだ。

**推尾** 安閑として何處を見ているか分らないが、佛教が教育機關の中に深入りしていくこと、現實にその職に立つてゐる宗教家が乳幼兒の教育に力を入れることが適切な方法である。生きることを愛することが宗教の眞實の姿である。

**龜井** 社會的に何らの影響を與へず、非常にわづかな人達で深い信仰をもつてゐるのがある。キリストは十三人の弟子しかなかつたそして最後はたつた一人であつた。キリストに權力を加へたローマ帝國は既になく、キリストは生きてゐる。親鸞、法然は乞食坊主であつて際をつき合せて語り合つたのであつて今の大教團を期待してはいなかつた。少數の人々を指導しただけであつた。

**學生** 宗教學校は今のまゝでよいか

**推尾** 今のまゝではよくない。全佛教が一つとなつて教育を受ける人には學資の苦しみがないうりにしたいものだ、今日の狀態では不充分である。全國の理解ある人々によつて立て直さねばならない。

**學生** 宗教には憧れをもつていないお經を聞いても分らないものに南無阿彌陀佛を稱へて救はれるでせうか。

**推尾** 莊嚴さにうたれ、ばよい。それだけでも意義がある。南無阿彌陀佛は一息一息の中に永劫の氣持に侵入していくので、永劫の息の中にある。こゝに集まつてゐるといふこともそのまゝで永劫の中に歩みをもつてゐる。一息の存在はこゝだけの問題ではなく、永劫の中に全うされてゐる。これを信するも

のには今の一つ動きの中に無量壽の光がある。南無阿彌陀佛は大きな愛と生命を一本の草花の中にも見るのである。生きることと愛すれば愛する程宗教に近づいていく。幼児の中からこれを受けてゆくやうにすればよい。

**大須賀** 神社を崇拜する。救ひの宗教を信ずるものとは宗教意義が違ふ。道を求めているもの、救を求めているものに與へてやることが大切である。抽象的な理論をひつさげても與へ得られない。

**學生** 不健全な宗教界であり、情性というが、宗教を悪用するものが前をばんでいるのではないか。

**龜井** 邪教的な宗教家もあるだろうが、それを求める人がある。本當の宗教と偽りの宗教を區別することが出来ればよい。それを信ずれば御利益がある。利益によつて人を導くのは邪教である。本當の宗教はそこから一歩進んで自分の願ひが適へられなくとも宗教に入つた場合それが本當の宗教であると考へる。功利性を伴つていないものである。

**司會** 新興宗教の話が出たのですが、これを大須賀さんと推尾さんとにきく必要があると思ひます。

**大須賀** 新憲法によつて、宗教團體法がな

くなつて、教義に關する書類を届出さへすれば宗教となる。これが原因となつて、宗教にあらざるものが宗教の假面を被つて事業をやつていふのだが、宗教團體としていふ。意氣と熱をもつて新興宗教を起した人があるが問題の對象となつていふのは届出たならば宗教とされるということが問題にされる。しかしそれ以外のこともあることを御承知願ひたい。

**推尾** 新たに出て來たものが新興宗教で、

法規上認められていふのが、六・七百ある。脱税、詐欺をやつていふが、これをどうしてゆくか、革新してゆくことを期待するが、新興宗教は花火のやうなものがある。しかし既成宗教もそれに數へられていふと思つて、更めるべき點は更めてゆきたい。

**學生** 宗教界は今のまゝでよいかではなくてどのような存續價值があるかである。

**龜井** この質問は根本的なものである。個人の信仰心の問題である。どういふ場合に宗教を必要とするかを考へなければならぬ。

人生はいつも平和で、思いどおり行くものではない。死の恐怖、罪の意識、病者の自覺、あやまつて罪人になつた場合、醫者に見はなされた場合、そのとき私達は絶望の中から宗

教問題に入つてゆく、宗教を信じない人にくら説得しても宗教を信するものではない。自發的に起つてくるものでなければならぬ。人がみな健全で善人でありさえすれば、宗教を信する必要はない。だが、實際はそうではないからなのだ。

**司會** これをもちまして、本日の「宗教界は今のまゝでよいか」の放送討論會を終りたいと思ひます。

## 椎尾僧正喜壽記念

### レコード

表 歸敬文 讃頌歌 ヒマラヤの

裏 心行き 時は今 いつでもどこ

でも

十吋一枚 金三百圓 荷造送料八五圓

椎尾僧正喜壽記念として家庭に眞佛法味を普及するために松濤基編曲の新おつともも明るい共生の歌を輯む、寺院の集會に家庭の和樂にぜひ備付けられんことを

(申込先)

吹田市片山旭ヶ丘學園  
(振替大阪八二五七五)

共生近畿總局



# 鎌倉大佛七百年の記

佐藤 密雄

鎌倉大佛は本年で造立滿七百年を迎へることになる。七百年前は建長四年（西紀一二五二年）であるが、當時の日記「吾妻鏡」の八月十七日に

「今日は彼岸の第七日にあたる。深澤の里に金銅八丈の釋迦如來像を鑄始め奉つた。」

と記されて居る。當時の八月十七日は彼岸の第七日だと記されて居るから、正しくは、本年秋の彼岸の終日で完全な滿七百年と言ふことになるが、鎌倉市では、陽春四月に鎌倉佛都七百年祭を行ふことになつて居る。

吾妻鏡には金銅八丈の釋迦如來像を深澤の里に鑄始めたとあるが、深澤の里とは、現在でも大佛の近處は深澤村であるから良いが、現在の大佛は金銅八丈の釋迦如來像でなく、青銅三十五尺の阿彌陀佛である點が違つて居る様である。然し、金銅とあるのは塗金佛だつたからである。現在でも大佛様のお顔には金箔の後が残つて居る。八丈とあるは、立てば八丈ある佛の坐像の意味だと考へられる。阿彌陀佛を釋迦如來と間違へることは一般人には一寸不思議の

様に思えるが、實は佛像と菩薩像とは明らかな相違があるが、佛像には阿彌陀佛も釋迦佛も身體の上には異りはなく、持物や姿勢や手足の動作の形で見わけるのであるから、僧侶でない吾妻鏡の記者には見分けがつかかなかつたのであらう。又建長四年の頃には、鎌倉には阿彌陀佛を本尊とする淨土宗寺院は淨土宗第三祖記主禪師の蓮華寺（現在の光明寺）があつただけだと考へられるから、阿彌陀佛にはなじみが少なく佛像を見れば佛教開祖の釋迦如來を想起することが常識となつて居たとも考へ得られる。明治になつてさへ、與謝野晶子さんは阿彌陀佛像とある標石を前にして居ながら此に氣付かず、大佛を仰ぎ見て

鎌倉やみ佛なれど釋迦牟尼は

美男におはす夏木立かな

と歌つて居られる。尤も其の後で阿彌陀佛であると知つて「釋迦牟尼」とあるを「お姿の」と讀み代へられたが、其を更に鎌倉の名所案内人達は勝手に「大佛は」と歌ひ代へて、「大佛は美男におはす」を流行させてしまつた。故に吾妻鏡の金銅八丈の釋迦如來像とあるは全く現在の三十五尺青銅阿彌陀佛像のことに間違ひはないのである。

然し乍ら吾妻鏡に依ると建長四年に大佛を鑄始めたところから、此時に初めて大佛鑄造の仕事始めをなし、其後何年間かを過ぎて完成した様にも受取れるが、此は大日本年表に記す様に「幕府宗尊親王の御病を祈り、金銅大佛を作りて深澤の里に安置す」とあるのが眞實と思はれる。宗尊親王は當時の幕府の將軍であつて、建長四年の八月四日から病氣になり、醫師も努力したが仲々には病氣は退散しなかつた様である。吾妻鏡に依ると、將軍の發病以來、三島其他の神社に神馬を奉納し、諸寺に令して祈禱をなさしめ、鶴岡八幡宮では連日魚鳥の助け放つ放生會を修し、又病氣平癒の仁王會を修して居る。何しろ、病氣は病魔の仕わざであると考へられた時代のことであるから、此を神佛の力で退散せしめんとして、幕府を擧げて社寺に供養し祈願を行つたのである。恐らく此頃に、深澤里に制作中の大佛も大體出來上つて居たが、然し未だ開眼供養には到つて居たのを、將軍の病氣と關係づけて幕府へ進言するものがあり、幕府も此に氣づきて急ぎ開眼供養をなしたものと考へられる。常識的には、彼岸の入りとか中日とかに供養すべきであるのに、彼岸も終りの日に到つてなして居ることは、未完成の部分之急ぎ完成して彼岸の終日に漸く間に合つたものゝやうである。そして、偶然にも八月十七日に大佛の供養をすると、それから七日を過ぎた廿四日には將軍の病魔は悉く散じたと記されてある。

## 二

本年七百年を迎へる大佛は、現存の青銅大佛のことであるが、此青銅大佛の出來る前には木造の大佛が存在して居たのである。吾妻鏡に依ると建長四年（西紀一二五二年）から逆つて九年前の寛元元

年（西紀一二四三年）の六月十六日の條に

「ひつじの刻に小雨雷電した。深澤里に一字の精舎を建立し、八丈餘の阿彌陀像を安じて、今日供養をのべた。導師は卿は僧正良信で讃衆十人であつた。勸進の聖人は淨光房で、此六年の間に都鄙を勸進し、尊卑は奉加せざるはなかつた。」

と記されてある。此勸進の淨光房は重源上人の弟子である。重源上人は現に奈良の東大寺重源堂にある國寶木像の主人公で、平重衡の焼いた東大寺の大佛及殿堂を復興すべく諸國を勸進してついに成功した人で、法然上人の弟子である。重源が奈良大佛を復興するや、師の法然上人を招じて盛大な大佛供養を行つたのが、建久六年（西紀一一九五）で、此時將軍頼朝は、二月十四日妻子を引連れて鎌倉を發し、三月十二日大佛殿供養會に臨んだのであるが、彼は此時に天下の覇府鎌倉にも大佛を造りたいと思ひ、更に翌十三日には大佛殿で鑄造技師の宋人陳和卿にも面會し、重源上人が通譯して、大佛再建の勞をねぎらつたのである。法し頼朝は此後三年にして五十歳の若年で逝去したので、大佛造立のことはなかつたが、妻政子や奈良へ同行した侍女の稻多野局等が頼朝の遺志を果さんとして大佛造立を思ひ立つて、奔走したのである。その結果、四條天皇の勅命で重源の弟子淨光房が勸進して造立に取かゝることゝなつたのである。四條天皇の即位は頼朝の死後三十數年の事であるから、政子や老女の念願の強き根氣の程も知られるし又大佛建立の容易な業でないことが思ひ到られる。吾妻鏡に依ると、嘉禎四年（一二三八）三月廿三日の鎌倉は人屋が皆破損して、庭の樹木が吹折れる様な大風があつて、「頗る魔障の日」であつたが、此日に「相摸國大佛堂事始」があつたが此事業は僧淨光が僧俗上下を勸進して營むものだ

と記されて居る。恐らく師重源を助けて奈良大佛復興につくした僧淨光の信用で、資金も集り大佛像及び此を安置する堂宇建立の見通しもつき、その結果事始めを行つたものと考へられるが、其れに引つゞいて五月十八日に大佛の頭が出来て此を擧げ奉つたが、大佛の周り八丈であると記されてある。蓋し、此日に佛體が完成したものと考へられるが、然し周圍八丈の大佛が二ヶ月以内で出来上るとは考へられないから、或ひは此時頭部が出来て組木の上に擧げ、其から下部を彫刻し始めたものとも考へられる。いづれにしても、此後三年にして仁治元年三月廿七日に大佛殿上棟式を行ひ、更に二年目の寛元元年一二四三年六月十六日に本節の初めに述べた様に開眼供養をなして居るのである。即ち吾妻鏡に

「深澤村に一字の精舎を建立し、八丈餘の阿彌陀佛像を安じ云々」と記されるのであるが、此の八丈とあるは、先きに述べたと同様立つて八丈になる坐像である。此の大佛が木造で東關紀行に「鳥瑟高く顯れて半天の雲に入り、白毫新に磨きて満光を輝かす」と讃頌されるものであつたが、寺傳に依ると、此から五年目の寶治二年（一二四八）の秋の大風で、十二樓の佛殿も大佛像も破壊したのである。其處で、僧淨光初め關係者一同は再び立つて、今度は僅々四年にして建長四年の青銅大佛造立となつたのである。

### 三

鎌倉大佛の七百年祭は鎌倉佛教の七百年祭でもある。鎌倉大佛の木造完成の年、即ち今から七百九年前は、淨土念佛が關東に來り、記主禪師の材木座光明寺が出来た年で、法然上人滅後三十年のことである。今年は建長四年が滿七百年であるから數へ年と言へば建長

五年が七百年であるが、此年の四月には、日蓮上人が安房（千葉縣）の小湊から鎌倉の松葉谷に入つて今日の日蓮宗を創唱したのであるし、十一月には宋僧道隆を鎌倉に迎へて臨濟宗建長寺が落成して居る。又此年の八月二十八日が曹洞宗の開祖道元が死して居る。

日本の佛教は念佛と題目と禪とで象徴される。佛教は遠く奈良朝からあつたが、念佛も題目も禪も鎌倉時代に生れたものである。法然上人の念佛が近代佛教の始まりであるが、其弟子重源が奈良の大佛を復興してその供養に法然上人が念佛を講讀し、其が遠因となつて重源の弟子淨光が鎌倉に念佛の本尊阿彌陀佛の大佛像を造り、時を同じくして淨土宗三祖が念佛の關東本山光明寺を開いて居るのであつて、大佛七百年は淨土宗の念佛の關東流通七百年でもある。

題目は日蓮の稱えたもので、此は本年が文字通りの數へ年の七百年であるし、鎌倉の禪は臨濟曹洞二派であるが今年七百年忌を営む道元は曹洞の開祖である。曹洞にしても臨濟にしても、鎌倉時代に武士を中心に禪が流行したのは宋から宋人の名僧が相ついで來朝したからである。當時中國では蒙古人の元が興り漢人の宋が滅び、宋僧が日本へ難を避けて來たのである。だから宋僧祖元に學んだ北條時宗が元の使者を切捨てたことも當然と思へるし、文永と弘安に禪できたへた日本武士が元兵と勇敢に戦つたことも、一因は宋僧の指導精神がこもつて居たとも言へるのである。宋僧禪門の鎌倉の大道場建長寺が出来、宋僧道隆の此に住職したのが數へ年七百年前の建長五年である。

鎌倉で行はれる佛都七百年祭は一大盛事と言ふべきであるが、此時此際に「佛教に鎌倉の意義を生きかへらすものは誰か」と問ひたい。佛者の深く省みるべき年でもある。

The eternal calmness  
-typical of the  
dreamless Nirvāna

## 外人の見た

### 鎌倉大佛

座像で、安定した感じのせい、筆を揃えて、その静寂と平和の相を讀んでいる。

神學並びに文學博士エストリン・カーペンターは、その著「佛教とキリスト教」の中で

みすがたは ゆめゆるぎなく 坐し給ふ  
そのおんかたち とはにしづけく

又、バイヤード・テイラーは「現代日本」の中で、次のようにいつている。

御佛にまいらせたこの記念像は、藝術及び宗教的感情の両面からいつて日本人の才能の最も完全な作品とみなされよう。ブロンズの巨大なる坐せる佛は、手に印を結び、頭をば、緩やかに傾けて、冥想無我の境に入つてゐる。……大佛の姿勢、その身體の均合の調和、衣の氣品ある簡素、それからして、かんばせの寂靜と晴朗とに、犯しが

## 近頃の大佛雜感

佐藤 治子

### 一

毎日一刻としてお線香の煙の絶えたことの無かつた大佛様も戦争が末期になる四五ヶ月前から參詣者もバツタリ絶え時々鎌倉附近の防衛兵が僅かな休憩時間に三々五々參詣に來る位で細々とお線香の煙が上る程度になつた。

住職は應召し九州の方へ廻はされた噂を聞いた位でどこに居るのやら心細い限りである。

寺の庫裡は高射砲隊の本部にあてがはれ、一部の部屋は他の部隊の兵隊が雜居し寺の者は茶の間と一、二の部屋をのみあてがはれ生

活してゐた。こうして終戦を迎へ由比ヶ濱の沖にはズラリト米戦艦がそれこそ相模灣を壓するばかりに黒々とならんだ、色々のデマが飛び飛行機からはビラが舞ひ落ちて來る。丁度鎌倉はその渦の中におかれた様で町はひっそりとして、婦女子はどこかへ避難すべき状態におかれた。私は心細いも何も考へてゐる餘地がなくて、大佛様を如何に守るか、汚されずにすむか。年とつた母と中學生の長男と七つの次男とをかゝえ、どうして生命を安全に守れるかと必死であつた、晝は裏山へかくれ夜は警防團の人達に交り女一人でも必ずこのお寺は守り通そうと悲しいなど思ひもよらない事で只一途に死に直行する途上にある

たい魅力がある」

このような寂寥は、本質的にどこからくるのだらうか、それは東洋のもつ最高智の状態——ニルバーナによるものと見た。

法學博士マツクレイは「日本からの手紙の東」の中で

「かの地に、大佛は露座に在し、頭を松樹の上に浮上らせ、顔は海洋の和やかなる波の彼方にめぐらせている——げに、迷ひなきニルバーナ（ねはん）の相にて」

といい、又、バーシバル・ロウエルは「極東の心」で、「鎌倉の佛……その壮大と高貴との全てなる顔には、示寂（sleeping）即ち、ニルバーナの此世ながらの（living）描寫がある」

とて、語らざる神秘的沈黙の底に悟りを感じてとつた。

又、平和な顔立ちを見ていると、そこから無限の慈悲が發光せられている相もわかるらしく、哲學博士ドレッサーは「日本の建築」に於て、

「その像は、嚴そかに憩うている状態で坐り、顔は類いなく落ついた表情をもつてゐる。その前額部には、光が流れ出すと想像される寶玉を示すいぼ（白豪相）が突出て

思、しかも他の事を考へてゐることなど出来ない。今考へると實に悲愴であつた。ところが一般の考へに反して米軍が上陸して來てお

そる／＼町の中を歩く様になつた。あばれる處かあちらがこちらを恐ろしがつて大佛様の胎内へ入る時は一人を残し番をさせ閉められぬ様用心してゐた位だ。

境内には軍の重要物資があちこちに未だおかれてあつた頃の或る日、米海軍のセーラーの一團がドヤ／＼と靴音高く大佛様のおひざあたりへかけ上つて行つて一人が寫眞をとろうとした。

私は何卒おりて下さいと丁寧にたのんだが一向聞き入れない。私はふんがいの餘り大たんにも、寫眞機のレンズを手でふさいでなほもおりなさいとどなつた。さすがに女の事としてその水兵は私をボカンとみてゐた、セーラー達もあきらめたか、口々に「リメンバーパールハーヴァー」とどなりつゝおりて來た。

それを聞いた私は大佛様を土足で汚された悲しみと、リメンバーパール、ハーヴァーの言葉に涙があふれて來てとめ様もなかつた。國民に何のこの言葉をあびせかけられる責任があ

らうか。

## 二

その後間もなく住職も無事歸山した、その頃米軍では社寺を守る爲M・Pを門前に配置した、今まで日本軍の兵隊のとまつてゐた境内の茶店の一軒の方を宿舍に今度は米兵がね泊りする事になつた。挨拶に來た兵隊は寺の者にもその頃はまことに得がたいアズズの一箱をくれた、お返へしに、まるで引越そばの様だなどと笑ひ乍ら、有合せのブドー酒を持つて行つたら大變喜んだ。

町の中も日に日に平和を取戻し大佛參詣の人達もふへて來た。土曜、日曜は米國の陸海軍の人隊が、境内一杯になる位來た、大佛様の臺座に、

「信仰の對照であるから上らぬ様に」と云ふ揭示を出した爲不そんな態度をとる人もなく只アメリカ發見前に作られた偉大な佛像として靜かに驚きの眼で仰ぎ眺めて居た。或る時は大變上手な丁寧な日本語の話せる二人の將校がお坊さんに會ひたいと云ふので座敷へ召じ入れると法然上人の御言葉「選擇本願」と

いる。これは、我等の聖書に表はれている「余は全世間の光なり」というのと同様なアイディアをシンボライズしている」といつている。

昔から御胎内に入つて参拜したものらしくキャブテン・サリス「日本航海記一六二三年」(慶長一八年)の九月十二日付には、駿河と江戸の中間にタビス(大佛)と呼ばれる特記すべき佛像があり、旅行者の崇拜する所であつた。中は空洞で、しかも堅牢な作りとなつてゐる。我等も中に入つて、わめいてみると、とても大きくひびいた。氏名やマークで落書がしてあつたので、まねをして書いた等誌している。

しかし、この大佛も

明治時代、大學醫學部講師をしたベルツの日記、明治十三年十一月八日の記事に、

麗はしくも崇い面影、日本政府は十年前、日本の有するこの最も優秀なる青銅像を、外人に潰しの値段で賣却せんと目論みた。とあるように排佛毀釋の波は臺座を揺がせた。思えばマ元帥が、進駐の際、先づ、乗機から目についたのが、このブロンズの像であつたが、之から外人の渡日とともに、海を超えてその平和の光を投げ給ふであらう。

讀んだのには驚いてしまつた。この人達は二三回訪ねて来て佛教の事を聞くのを楽しみにしてゐた、勿論日本語である。こう云ふ態度のアメリカ人はその後も幾人か佛教の話聞きに來た。非常にけんそんな、そして日本人を尊敬してゐた態度は忘れられないものであつた。アメリカ軍は宗教家は皆將校として召集されたのに住職が一兵卒として應召したと聞いた時には大變おどろいてゐた。私がリメンバーパールハダアの事を話した時は或る飛行將校は今度そんな事した人達には逆に「貴方は教會で祭壇へのぼるか」と聞いてやりなさいと教へてくれたものだつた。

この人は歸國後もなほその後大佛様へのぼる様な者が居るか聞いてくる。餘程私達に悪い印象を與へた事を残念に思つたにちがひない。

最近印象に残つた外人参詣者の中で昨年の秋サンフランシスコでの調印式に参加した、セイロンの代表の大蔵大臣とその一行が來られた時玄關の外で靴をぬぎはだしになつて合掌して住職に挨拶して座敷へ上られお内佛様にも丁寧な参詣された後、二三十分話して歸

へられ、その時佛教國として日本の爲に調印して來ますと云はれた事だつた。勿論玄關を出られる時も合掌して別れて行かれた。色々な人が居るけれど、私達を宗教人として丁寧に尊敬をもつて交際してくれる外人には宗教を認識する氣持が實に沁み渡つてゐる事を思はせられる。何の宗教でも信仰の心を持つて居る事に對して或る安心感を持つ様な處はほんとに羨ましい事と思ふ。そして自分は何々教の信者であると云ふ誇りももつてゐる事である。

最近ラジオに或はニュース映畫などにまで大佛様はクローズアップされる様になり昨年十二月には藝術大學の西田教授が大佛様の御顔の測定をされ、その結果は四月の七百年祭までには發表される事になつてゐる。

今日までの大佛様をお守りして周圍の移り變りを眺めてゐた私達にとつて奉讀會が結成され或は町内の人達が盛大な祭典を催そうとほん走して居られる事を見るにつけ涙の出るしく大佛様も靜かにこの喜びを受けて下さるにちがひないと固く信じて居る。

## 芝園だより

◎櫻咲く四月八日は花祭り、本號は、大にその内容を以て、御佛の誕生を祝した。はるばるインドから特に藤吉氏の稿も得た。七日は宗祖法然上人の御生れになつた日である事も忘れてはならない。

◎又、本年は先號でお知らせした通り鎌倉大佛七百年祭に當り、鎌倉空前の盛大な佛都祭が四月にはじまり、十四日は大佛で大法會が営まれる。皆様の御參詣をおすすめする。いうまでもなく本誌同人佐藤密雄氏の自坊で、御骨折により、日一日と、その光が輝いてゆくのは喜ばしい事。御夫妻揃つて本誌に記念の筆を。

◎先般放送せられた光を掲ぐる人「法然上人」に、村田嘉久子女史も出演せられたのであるが、最後室の津の段の時には御病氣であつたのに宗祖のためならばと高熱を

おして御出演、終ると同時に、もより虎之門の病院に運ばれ昏倒せられた。その御信仰の念の厚きに感激する。誌上心から御禮申し上げます。幸いもう全快せられた。又、元氣に呼びかけられる日も近いでしょう。

◎この「法然上人」は、各位の御要望により來月號から連載致します。御期待を乞う。(竹中)

◎倫理科、漢文科、武道等の復活の呼び聲も、一には、戦後の亂れた人の心を反省する國民感情と見てもよいであろう。その意味で宗教も大きく且嚴肅に見直さるべきである。かゝる點から、本誌討論會、例月訪問・村岡女史は何ものかを訴えている。

◎高橋良和氏先日上京、元氣な顔を見せる。京都方面の原稿も今後大いに期待。

◎廣告掲載御希望の向は御問合せ下さい。

◎誌代御送金の節は、御知らせした不足金若くは餘りの金額をなるべく差引して、半年、又は一年分を御送り願います。

◎最近の新聞論説は、妙に、どれもこれも同じ問題を、同じような妥協的立場で論じているのが氣になる。偶然そうなつているのであればよいのだが、我々は自由に考え、自由に論じたい。

◎藤井氏浄土有縁の人々は、現實に法を體現し味う人々を知らされ、長らく多大の感銘を與えてきた。六月よりは阿彌陀經のお話を願う事となつた。

◎來月は、藤田寛雅氏の一周忌追善號を出します。早いものである皆様の努力による最近の充實ぶり、幾分なりとも氏の抱負に應えるものであらう。

◎大島泰信先生御遷化。高かりし學德を偲びつゝ、御冥福をお祈りします。(龍海)

維持會員芳名(敬稱略)

今村長治右衛門(長崎)

誌代別

誌上厚く御禮申し上げます。

誌代

會費半ヶ年二百圓、一年四百圓(ト共)毎號定價三十圓ト四圓、前金切次第清算通知申し上げます。確實便利な振替を利用して下さい。

「浄土」 四月號

昭和十年五月二十日  
第三種郵便物認可

昭和廿七年三月廿五日印刷  
昭和廿七年四月一日發行

(定價三十圓)

編輯兼  
發行人 眞野正順

印刷人 春山治部左衛門

東京都千代田區神田保町三ノ十

印刷所 共立社印刷所

東京都港區芝公園五ノ一〇

發行所 法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

電・芝(四三)一三二八

會員證號B一〇八〇一四

支店・全國主要都市に二百三十餘ヶ店



# 協和銀行

本店・東京港區芝大門

財団法人結核豫防會  
結核研究所長

隈部英雄著

裝幀飾畫  
鐵指公藏

毎日出版文化賞

## 結核の正しい知識

定價  
三〇〇圓

(朝日評論書評) 本書はありきたりの解説書ではなく、最高級の結核病學なのである(中略)患者や一般人だけでなく全國の醫師諸賢にもぜひ讀んで頂きたい。

東京都千代田區神田三崎町一ノ二結核豫防會内

發行所

保健同人社

## 御袈裟法衣御調進

- 錦金襴
- 特種織物
- 御水引
- 御打敷
- 御幡
- 稚兒衣裳

御法要に梵鐘供養に新裝の稚兒貸衣裳を精々御下命の程を

東京都港區西久保巴町一〇六

御用達

### 野村法衣店

電話芝(43)〇四二八番  
振替東京七八九四五番

増上寺  
宗務所  
大正大學  
芝中高校  
淑徳學園